

たかさわ「史話」36 労働者の心意気

春先に東京の三菱史料館をたずね、三菱製紙高砂工場の史料を閲覧させていただいた。

ポツと此の首を切って貰った方が得心がいくのです。生殺しせられては困る」という発言も飛びだした。

そのなかに一九二五年の労働争議にさいし、労働者がなにもを思いどう感じたかを示すものがあつた。庶民の精神史にかかわる貴重な史料なので、すこし紹介しておきたい。

「男が一旦工友会に入会し、

労働運動の路線をめぐるイデオロギー論争がさかんな時期だが、末端の組合員はむしろ義理人情の精神世界に生き、争議にもいわば「男気」で参加していたことがわかる。

(中略) 罷業断行を約束したる以上、今更裏切つたなら社会の人は何と言ふでしやう。不信用な男、人面獣心な人間と云ひませう。」「会社に義理がありませう。(中略) 又一方には人情、此の人情の為に板挟みになつて居ります。」「

これらは青年労働者がだした手紙の一節である。九月五日の労使会見の席上、ある組

合側代表が「私は会社へ来たんです。皆が休んでいるから人情で休んで居るのです」と述べたことに共通する発想であろう。同じく一六日の会見では、「此の不景気に解雇せらるゝ程なら実際に男らしくス

合側代表が「私は会社へ来たんです。皆が休んでいるから人情で休んで居るのです」と述べたことに共通する発想で

この激しい怒りの背景には、義理人情の発想とともに、過酷でストレスの高い日々の暮らしがあつたのであろう。

(高砂市史編さん専門委員

三輪 泰史)